

坂井幸二郎さんを偲んで

日本共済協会元参与 坂井幸二郎さんが平成28年5月1日にご逝去されました。(享年98歳)
謹んでお悔やみ申し上げます。



最期まで生きぬく人生

坂井幸二郎さんには生前にお会いすることはなかった。一昨年9月に当協会に着任した際、保険研究所社長の島田和明さんに、病床の坂井さんにお見舞いを兼ねてご挨拶したいとお願いした。意識はしっかりしているがお身体が不自由とのことで、実現しなかった。その後、これは「縁」というしかないのかもしれないが、当協会ができてからの「共済と保険」の巻頭言選集を編むという話が始まり、島田さんを介して坂井さんとの最期の間接的な会話が始まった。

「共済と保険」誌は、技術的に共通する共済事業と保険事業が、それぞれの目的と理念を追究して学び合うという意味で名付けられた。それが、この10月に700号を迎える。実に57年の歲月である。当協会ができる平成4年より前の「共済と保険」(その前は「共済保険研究」)の巻頭言のエッセンスは、坂井著「時言録」として発行されている。今回の巻頭言選集は、それ以降の24年分、288篇のなかから142篇を選んだもの。坂井さんが執筆されたものも2篇選ばれている。熊本地震の発生していた4月15日に発行した。一線を退いた坂井さんが日本の共済事業の進路を気づかい、毎号の論調を注視されていたことは想像に難くない。700号にいたるまでの論調を巻頭言選集として編み、「時言録」と通貫させることができたが、その感想をお聴きすることはできないままになった。しかし、お会いすることはなかった坂井さんに、背中を押され続けていたという感覚は、いつもあったように思

う。このような仕事はそういうものなのかもしれない。亡くなる1週間前に気にかけていた巻頭言選集が届き、坂井さんはそれに目を通されているとのこと。3月発行予定が4月になったのだが、心のどこかで、「間に合った」という当方の何か安堵のような気持ちもある。

坂井さんには、「最期まで生きぬく人生」という形容をしたいと思う。巻頭言選集の原稿再掲載の承諾書に最初にサインをくださったのは坂井さんだった。現場に居合わせた島田さんによれば、「自らペンを取って紙を凝視して震える手を抑えながらお書きになった」とのこと。巻頭言選集のタイトルは、このような坂井さんの収録原稿に脈打つ強い思いをくみ取って、刊行委員長の関英昭先生が『協同組合の心を求めて』とお決めになった。坂井さんの柩には原稿用紙とともに、祭壇にも飾られた2冊の書物が入られた。一つは坂井著『共済事業の歴史』(平成14年発行)であり、もう一つが『協同組合の心を求めて—「共済と保険」誌巻頭言選集—』であった。

坂井さんの幅広い活動や当協会の設立と発展に尽くされた功績はあまりに大きく、臆する気持ちを抑えて先輩諸氏やこれから活躍される役職員の皆さんへのご報告としたい。

坂井幸二郎さんのご冥福を心からお祈りいたします。

日本共済協会 専務理事 伊藤 澄一

坂井幸二郎さんの思い出

坂井さんの後半の半世紀の人生は共済とともにあったといえるだろう。それを、本誌とのかかわりを中心に振り返ってみたい。

<坂井さんの略歴>

1917（大正6）年栃木県生まれ。

1949（昭和24）年（株）保険研究所に入社後、1959（昭和34）年の共済保険研究会の創設、月刊誌「共済保険研究」の創刊に中心的な役割を果たされました。以後、同社で「インシュアランス」編集長、社長、相談役、顧問を歴任する傍ら、共済や保険に関する執筆や講演を多数行われました。

本誌の誕生と坂井さん

坂井さんが共済事業にかかわりをもつきっかけは、1959年当時、保険研究所の顧問であった谷田部義雄さんの一言だった。そのことを、本会が設立された1992年4月の本誌「巻頭言：意義ある船出に寄せて」で次のように述懐されている。

「いま農協共済はじめ数多くの共済事業が興り活発に活動しているが、同じく共済事業をやっているのに、根拠法も行政庁も異なり皆思い思いにそれぞれの分野で活動していて、それらの共済協同組合間にはまったく横のつながりはなく、これといった交流もない。また情報交換の手段もない—ということで共済協同組合全体を結び付ける手っ取り早い方法は、共済全体を横断した情報・啓蒙・論評のための雑誌の創刊だ。やってみないか」。このように雑誌の創刊を勧められたのだ。同社の当時の島田信三社長の了解もあり、話はさっそく具体化する。明治大学の印南博吉教授を会長に共済保険研究会を立

ち上げ、月刊誌「共済保険研究」は同じ年の1959年6月に創刊する（1964年6月号から「共済と保険」に名称が変更される）。

創刊号の位置づけを坂井さんはこう述懐している。



「共済と保険間の対立的感覚はすでに時代遅れであり、いかに理解し合うかの段階に来ている。従ってこの試みは生・損保業界からも、多くの声援をうけている。本誌の性格は、あくまでも学問的立場から厳正に研究し解明することであり、いずれに偏するという事は絶対はない。

つまり本誌は後の名称「共済と保険」のとおり「共済」と「保険」の懸け橋となる位置づけだった。

島田信三社長は各共済団体に対して共済保険研究会への参加を要請し、保険会社各社を訪問して月刊誌の購読会員を確保された。

本誌は創刊以来、坂井さんをはじめ共済・協同組合関係者はもとより、保険関係者からも多くのすぐれた論文をいただき、今月で696号を数える。

「象牙の箸」に込められた坂井さんの思い

さて、日本共済協会の設立は1992年4月だ。

「共済保険研究」の創刊から33年後のことである。それだけ紆余曲折があり、協会設立は難産だった。設立に苦勞された一つのエピソードが本誌2005年4月号「時言月評：象牙の箸」に披露されている。坂井さんは「中國宮殿・マンダリンパレス」と彫り込まれた象牙の箸を愛用された。この場所で、初めて「共済協会設立」の提言がなされたからだ。

このとき「マンダリンパレス」に集まったのは各共済団体の幹部、共済の理論家・実践者たち。その席での提言だったが、このときの出席

者の印象は、“唐突”“時期尚早”だった。横のつながりも大事だが、その前にまず、各共済団体は一人前になることが先だった。また、各共済団体は、対象とする組合員が農業者、漁業者、労働者、中小企業者とバラバラで、事業もそれぞれ特徴があり、所管行政庁も異なっていた。そのため、同じ共済協同組合ではあっても、銀行や保険業界のように一つにまとまる話にはならなかった。

この日の会合は「総論賛成、各論待機」ということで終わったが、坂井さんの日本共済協会設立への思いは絶えることがなかった。このとき蒔かれた種は、十数年後に芽ぶき、協会設立に至る。「マンダリンパレス」は、いわば協会発祥の地でもあり、坂井さんは「この箸は、終生、私の食膳から消えることはない」とまで言い切っている。

なお、協会設立後、共済保険研究会は協会の一機構として残り、その機能を協会が引き継ぐこととなった。

坂井さんの憂い

日本共済協会は、設立してまもなく四半世紀を迎える。共済事業規模は年々大きくなり、組合員7,558万人、契約件数1億5千万件、受入共済掛金7.8兆円、支払共済金4.5兆円、総資産62兆円に至っている(いずれも2014年度)。ただし、坂井さんは手放しでそれを喜んでいたのではなかった。

創刊50周年の2008年6月号「巻頭言：600号所感」で、「同一市場内での保険との距離の接近」、すなわち“共済の保険化”と“保険の共済化”といわれる現象を憂いておられた。

保険業界も「一人は万人のために」という言葉を使って「助け合い」を強調し、共済に近づきつつある一方、「助け合い」の本家である共済事業は、そのコアである助け合いの“こころ”を失い、保険会社に近づきつつあるのではないかという憂いだ。



「共済と保険」50周年感謝の集いで挨拶する坂井さん

「共済は共済であれ！」

会員団体から「坂井先生がお元気なうちに話を聞いておきたい」との声が多かったこともあり、坂井さんの講演を聴講し、本誌にその概要を掲載させていただくこともあった。

直近の講演は、2011年3月5日の共済研究会主催のシンポジウム「共済事業の現代的意義を考える」。そこでの『共済研究半世紀に思う』（本誌2011年8月号に掲載）だ。講演で坂井さんは「わが国の協同組合保険は、各国にはない大きな特徴があります。それは戦いとった協同組合保険だということです」「共済は、いかに“助け合い”を踏まえて進んでいくかに尽きます。その姿を黙って示すこと—それは助け合いの心の表現です。助け合いをしっかりと実行することのポイントは、共済金をしっかりと払うことにつきまます」と述べられ、これが本誌誌面での最後のメッセージとなった。

講演の最後に、坂井さんはいつも力を込めてこう言われた。「共済は共済であれ。その心は、いかに支払うか、なのだ」と。

坂井さんの思い出

時は2001年4月。思えば私が日本共済協会に出向して最初の仕事が坂井幸二郎さんへの挨拶を兼ねた本誌への寄稿依頼だった。日本共済協会結成10周年記念企画として『共済事業の歴史』と題する特別原稿だった。

保険研究所の応接室でお願いしてご快諾いただいたが、坂井さんは「これが僕の遺言になるでしょう」とおっしゃった。「先生、そんなことおっしゃらないでください。まだまだご活躍いただかなければ……」とその場に居合わせた全員でお願いしたのを今でもハッキリ覚えている。『共済事業の歴史』は2001年6月号から1年間連載され、それをまとめた書籍は現在も発売中で、ご注文をいただいている。

坂井さんはこのほか「時言月評」という本誌のコラムも毎月、執筆されていた。保険研究所への寄稿も積極的にこなされ、当時80代半ばで、あの元気さはどこからくるのだろうかと思ったものだ。

その頃の坂井さんは本会参与として本誌の編集委員会に出席いただいていたが、いつも各委員の意見を、うなずきながら静かに傾聴されていた。「こうして若い人たちの意見をきくのが楽しいんですよ」と言われたのを思い出す。委員はみな40代以上であったが、坂井さんから見

れば二回りも三回りも若かったのだ。

本会の事務所が平河中央ビルから新宿三栄町に移転した後、編集委員会の前日、坂井さんが小雨の中、事務所にお見えになった。委員会の日を間違えたとのことで、応接室でしばらく話されたあと私がタクシーを手配しようとするとう坂井さんは、かたくなに辞退された。

「いやあ、雨も降ってますし、歩いては危険ですよ」と私が言うと「僕は今まで、保険会社をすべて歩いて取材してきました。だから今も元気でいられるのです」と結局、事務所から都営地下鉄の曙橋駅まで歩いてお帰りになった。

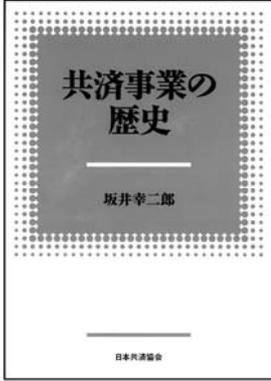
この坂井さんの一言が刺激となり、以来、万歩計を携え、なるべく歩くことにしている。歩いていると認知症予防にもなるようだ。

坂井さんとの最後のやりとりは『協同組合の心を求めて－「共済と保険」誌巻頭言選集－』への論文再掲載を承諾していただくことだった。

保険研究所の現社長 島田和明さんの仲立ちでご本人から承諾書をいただいたが、病床で手が震えてやっとの思いで署名されたという。

その署名を見ていると「共済は共済であれ」という坂井さんの言葉が響いてくるようだ。坂井さんのご冥福をお祈りいたします。

日本共済協会 共済と保険企画室 今村 良一



「共済事業の歴史」
坂井 幸二郎 著

同書は、半世紀以上にわたって共済団
体を見守り続けてきた著者による共済事
業の歴史の集大成。共済草創期の人物と
じかに接した著者ならではの記録でもあ
ります。そして、著者の共済事業に対す
る熱い思いが伝わってきます。

〈体 裁〉 A5判 276頁
〈額 価〉 1200円(送料別)

〈掲載内容〉
第1章 産業組合と保険運動
第2章 共栄火災の設立
第3章 協同組合保険法始末
第4章 各種共済の誕生と発展
第5章 共済と人(共済人物誌)
第6章 二十一世紀の共済